

萬玉夢戲語

特柳田文庫  
文庫11  
A 748



特 A748

# 萬國夢戲語初輯

おれいこのめのおれいこのめ



落落乾坤人亦西

# 東洋山人戲編

おれいこのめのおれいこのめ

48-8994

五三三

往昔昔の趙高始て馬廐と論じて  
 少里以宋故人一火人馬廐に死  
 勝西を毛と戲述その意をいし馬廐戲て  
 一具は山あり、その母子得替の冠とらよ  
 ろして看官奉子の痛小堪氣、その自ら  
 眼の外と知り、然れどと山い近世の古的  
 少して、考今テの看官の總功者、馬廐戲、  
 作者の瘡絶、多くと新奇、新案とて、萬國

萬國夢戲語

巡覽いざうまやいるト、或は金の應雲ふ固  
辞ものまに水ぞ美諾一が、一丸院室の学也  
ふりれど案一まと中編で全部ふか  
綴祭と、神皇御代、蘇我の祢のいしく、と  
急迫ふ阿含とあり、  
于時又久三三三のいしく、  
其の厚小因縁ある文之同の

東洋山人述



栗毛 萬國夢戯語  
漂客

日本東洋山人 編次

初回  
兩個載て萬國の事説と問ふ  
東洋答て五ヶ國の風土と説く

夫博く物と識のい書友ふ如いる一と自ら説る  
隠士あり、男一して東洋と一人、性質雑学と好て  
静室小居ると楽とよ、元来如い短くして

古  
我  
吾

鴨の腔と等しく、彼蒼頡の文字に向ふ文能の  
 不能解、と水ゆく、經学の研究ハ、とも、不及カ  
 珠文漢語、作詩ハ野菜ハ作らる下等、詠哥ハ  
 小町ハ訛評と、これ書ハ、蚊脚蟹行のどく、筆画ハ  
 方圓の画則と、矢い、ま、筆術ハ、呉服店の主官ハ  
 恥うれ、医学ハ、庸医の薬箱持より、考り、易学ハ、  
 一向不的で、鳥ハ、馬廐ハ、これ、斯様、各と、並み、  
 未熟ぬい、これ、白痴の、言人、る、ね、い、る、  
 然れど

飽まで書籍と母分、たとい、齋臭の、喰損、一書冊と  
 得、この、酒、乃、臭の水と、おろ、が、こ、く、或ハ、空腹ハ  
 食物と得、ら、が、ど、し、  
 差別、る、く、一度、巻と、板、  
 一、こ、も、い、と、短、く、眠、  
 喜樂、極、り、  
 戲、  
 恥、入、  
 一、こ、も、い、と、短、く、眠、  
 喜樂、極、り、  
 戲、  
 恥、入、

當今江湖の騷亂と志心ゆん為の養気する人人生  
まづり 蜉蝣の一世 諺と 齋考や 命あるもの  
一身あり 善も悪も 定ぬ今世と 苦勞小五  
臟と 損傷するに 詮らう 業と 氣と 轉ト 例の書齋小  
静座也 自然と 心魂が 廣大なり 机卓小も たて  
考案するも 不折く 書齋と 訪よもの あり けり  
るる人ぞと 三疊へ 出せば なる水ぬ 旅の 同行 二人  
冠一笠と して 小取りの けり ひと 町崎 小門 戸 くら

へい 志心 免るる こと 矢 礼る こと 些 物と  
お尋ね 杯 杯 や せが け 也 不 東 洋 とも 西 洋 とも ちて  
何ん どの 方 角 と 稱 する 先生 何 方 で ござい ます 秘  
主人 こと 水い お ぬる さい スリ マ 何ん と 言 作 ます 能 角  
先生 と へい や ぬ 其 板 する 人 け 也 身 や ア ござい  
ません 夫 たり や 松 が 北 隣 家 南 隣 家 で 聞 て 何 人  
へい ませ へい こそ ぬい ぬい 先生 何 や へい が ぬ  
やせん 貴 夫 こそ 五 で 文 ころ 直 板 ころ ころ くら くら

兩隣家の主人が「やまくら」その中へ問闈まじし  
 やそのの、たむけひらふは作れとい、室は四方とも方  
 角と矢ひ、商人とも十方おくれまよ、可相成るら  
 何卒能う天で、その先年、拜回とい、七乗ま  
 せんり、一へエ、それをい、く、陸合、く、動兵が、こい  
 ころ、とい、つ、あ、の、い、ま、い、り、き、や、い、い、ら、と、い、い、わ、く、が、い、い、  
 こ、い、も、ろ、で、や、う、が、ま、い、こ、い、や、り、と、い、い、わ、く、が、い、い、  
 心流るせ、此器は、そのころ、黍、ゆ、磁盤妙針と、中  
 して、その方角と、建ち、く、い、奇、妙、(何、て、い、へ、家)

又、又、瓜、で、こ、い、ま、い、ま、い、よ、く、北辰妙見尊星と、御  
 信心に成て、其処へ置居て、心流るこい、へ、エ、そ、ん  
 る、ト、何、ん、と、い、ん、作、ま、い、ま、い、此器とい、信、作、ま、い、て、い、だ、お  
 置居、い、先生、の、方角、が、お、い、ま、い、ま、い、と、い、い、く、有、誰、人  
 を、中、ま、い、ま、い、ト、い、い、つ、て、お、い、ま、い、や、い、い、ま、い、  
 南無北斗北辰尊星、王大子、願、い、方角、先生、の、住、所、と  
 教、給、ト、い、い、つ、て、お、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、ま、い、  
 貴人、一、を、心、流、る、せ、い、通、り、貴、丈、の、方、建、や、ま、い、

五口

えんこ  
あつで  
あまの  
まじり  
りふ

あまの  
まじり  
りふ

あまの  
まじり  
りふ



あまの  
まじり  
りふ

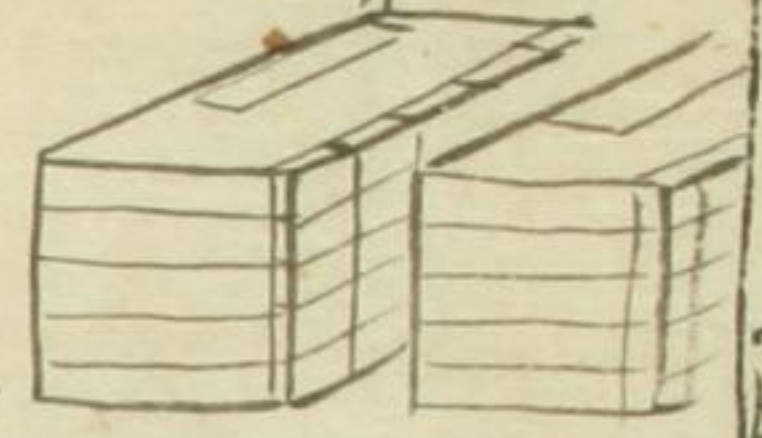
あまの  
まじり  
りふ

あまの  
まじり  
りふ

詩

あまの  
まじり  
りふ

あまの  
まじり  
りふ



洋字書  
の

戯作文庫  
の



あまの  
まじり  
りふ

あまの  
まじり  
りふ

そ〜てきい、文字でい東方と違〜く〜と〜やら  
貴丈が東洋先生のようてございませよ、  
るやど、その東洋とい愚拙が御せとございま〜と  
これがあゝの東西も〜と〜し〜と〜ゆ〜もので、これ  
た〜ふ失礼〜と〜し〜、サ、存致、懇懇と〜さら〜と  
旅勞もあ〜ら〜ら〜、何卒、ア、座不〜ら〜  
〜へ〜く、誰有ら〜下や〜、そんなら、貴丈が東洋先生  
でござい〜と〜と〜い〜と〜と〜、先生と〜尋子

あ〜と〜ふ、彼、知〜知〜と失途て、ち〜ふ〜戸違〜とい〜  
と〜と、苦勞と〜、〜、〜、當日、神而、拜顔、よ〜  
〜、旅の重荷とあり、〜、安慮い〜とせよ、  
これ〜く、心配でござい、〜、  
何、方、で、ござい、〜、  
八町堀の裏店住居まで、旅縁と〜、や〜、僕が、か  
〜、  
〜、  
〜、  
〜、  
〜、  
〜、  
〜、  
〜、  
〜、

東洋先生記



こついでまほ何卒まほ向後ハ知已て下つて  
「エえんろ下西君ハ先歳膝栗毛で旅樂と  
まつて、（書） 暗誓人でこついでまほしうろ、（書） 実不 珍奇両君  
「後、下イマゆる反快に作れてい、（書） 実不 珍奇  
只今強二の不通北八とまほそ未熟りのでこついで  
やほ何卒まほ何卒とも知已とまほして下つて  
「それいも、（書） 何卒のりてまほまほ何卒まほ  
千秋万歳孫がいまほまほまほ、（書） 今般愚僕不

面會と能くいふるまほまほ、（書） 何角御用話であ  
まほまほしてのり孫、（書） 反快にこついでまほして、（書） 先全  
まほまほの素知もまほまほやせまほが、（書） 私共昨年まで  
東海木曾の兩街道とまほまほ、（書） 甲列大山笹島巡  
覽ハ勿論、（書） 大日本一圓と、（書） 金草鞋で巡国まほまほ  
ゆゑ、（書） 此後巡覽地もまほまほ、（書） 以後の通り、（書） 越々  
白髪奴とまほまほまほまほと、（書） 下つて、（書） 辞世して、（書） 地獄に  
まほまほ、（書） 浄土へ往るり、（書） 下つて、（書） 兼々その表懸と、（書） 案内

西  
成  
語

○ 過去ハ輕尻 現在道中黃泉戲言 全本 未定

ト野ヶ、大凡腹橋の如きは、  
及老ての望長命、何卒、  
ぞ、  
後でのあるツ、  
大人よハ死別、  
いとせむと、  
無詮方の勘考で、  
富貴ハ寤て待とあ

譲ゆとごい、  
隠住で居、  
借金ハ都合、  
月延ハ困果、  
裏店と密出、  
江戸近御、  
古絶せり、  
近御の、

とーやーが、その私共五人でいつ、勘考も  
せやせんく、或日(貞)大人の臺詣とと、私共  
智恵(叢)と授與(め)られし、そりやめ、一念(ん)祈願(ねん)や  
し、こふいらの奇異(きい)が、こふい、その特(とく)墓(ぼ)の  
下(した)小(こ)聲(こゑ)が、らつて、強(や)次(じ)に、素(す)た、うと、私(わ)共(ら)五(ご)人(にん)で、は、や  
し、こふい、そらこそ、一九(いちじゅう)の函(はて)冥(めい)が、出(で)婆(ば)婆(ば)と、北(きた)ハガ  
悲(かな)驚(おどろ)愕(おどろ)を、ぬり、私(わ)の、と、う、や、淋(しみ)然(ぜん)、戰(いく)慄(れつ)し  
る、早(はや)と、清(きよ)して、墓(ぼ)下(した)より、一九(いちじゅう)先生(せんせい)の、う、と

聞(き)や、ふ、此(この)間(ま)ハ、殊(こと)北(きた)との、こ、世(よ)度(ど)小(こ)田(た)入(い)であらう、  
と、こ、て、我(われ)が、今(いま)その、智(ち)叢(そう)と、授(う)與(よ)し、り、入(い)り、出(で)来(ま)い、  
天(てん)り、や、ま、何(なに)故(ゆ)と、と、ど、ら、う、が、穢(きた)土(ど)と、滓(じ)土(ど)とい、  
月(つき)兔(う)小(こ)團(だん)龜(かめ)を、ど、ら、う、ひ、折(お)角(かく)愚(ぐ)案(あん)と、述(の)ぶ、し、ら、  
着(き)官(くわん)が、え、る、そ、り、や、虚(う)ら、や、と、こ、に、必(かな)定(ぢやう)、そ、ん、ま、  
地(ぢ)獄(ごく)う、赤(あか)息(いき)の、連(つれ)て、赤(あか)舌(した)で、の、按(お)と、り、さ、  
ら、う、が、具(ぐ)指(し)る、臆(おそ)説(せつ)ハ、着(き)官(くわん)合(ごう)点(てん)、舌(した)と、せ、て、大(おほ)火(ひ)  
居(ゐ)や、見(み)た、とい、ま、本(ほん)字(じ)不(ふ)し、う、序(ぎ)詞(じ)の、録(ろく)傳(でん)

故人の意匠に捨絶し、とりやめし、とて大目的  
 ろいふ、まづ我が世にあらつりと慮断し、能  
 えざると斯様まづちやア文化年間の人情笑と  
 してもの人生ハ七轉八起で、その不仕合と救ふ  
 こそ仁道ともいふ、幸ひ我が駿府ハ當時  
 東洋山人とふ我輩がある、この愛人とのみ、  
 勤考とづけられてもらはせ、と、いふくとおの  
 其処ハ一九の臺所である、王子稲荷の神殿ハ

昼寐の夢由、眞果ハ夢戯語でござい、北ハハ  
 其折、同様の夢とて、相互奇異のゆひと、じ  
 夫々、東都と奈良で、無的の夢路と、駿府まで  
 過々、まづ、且、當日不慮寄、先生ハ、拜顔ハ、  
 故人、眞の誘引で、ござい、何卒、奇異、因縁と  
 慮断、定ふ、辞退、い、ござい、一旦、案、迷  
 下、い、戸、して、滑稽、洒落の、御戯作、い、願、い  
 願、う、ま、い、へ、エ、板、で、ござい、あ、ら、う、板、を、し、ら、ふ

三日月の爽水の溜々々々、登端の戯話ごとんと  
ゆる分解ほしむが、即今に居るおたのみの首尾  
至極有理屈かいとごいませむが、たとい貞大人の  
導縁ありしう、禁が意匠と考てあげらうとふ  
字やハ元来ごいません、この儀をうりに押票  
固辞とやませ、下先生をぬぐひ、あんまう人憎  
るいどやアごいません、一尺振く、只今孫二が  
願くまこととあり、先生が承諾て下とトぬくと

終地獄への性ごアるりやとまい何卒とことと  
不復奴と慮引、押而承諾とゆげまこと、一尺振  
両君おこぼれ、おぼれ、おぼれ、禁が困果でこいませよ  
今その作ふまごひ直毛ととつて、何とてア天狗  
自慢小案ませしむ、あまらるる戯述ちりして  
着官の誹謗と蒙より、まづ無言が當世で  
賢いことごいませ、まづ我を根固辭るごい  
まして、押とと押しごいませんが、まづア勘考

巻一 戯話

てもい流るせし、是限無言ふるまうてい  
 此書の外題小的いせん、從是後巻が意味正  
 識、樞要、や、さういせんり、ト、いられ、さうやうやく、秘人と  
と、せんりく、や、さう、こま  
 ぬ、ま、志、り、く、く、わ、り、が、か、この、ま、ち、の、  
 ふ、こと、さ、さ、う、う、づ、う、つ、も、て、や、さ、う、り、が、  
 解、り、の、その、金言、鉄、回、皮、で、兼、諾、い、と、い、ま、せ、し、  
 乍、然、所、詮、（真、大、人、の、滑稽、風、い、な、ま、せん、り、何、卒、  
 その、心得、で、は、讀、ま、せ、し、（尺、柄、多、く、本、実、の、兼、  
 諾、で、誘、導、す、べ、し、ま、さ、く、（東、洋、、へ、い、こ、虚、言、ハ、あ、り、し、

ません、（六、、と、れ、り、く、難、有、く、ま、や、ら、イ、強、次、え、  
 先生が、兼、引、の、つ、ろ、こ、に、地、獄、遊、り、る、ん、ご、ア、（辞、世、人、  
 の、考、験、し、と、で、あ、ん、ほ、し、不、面、白、也、と、れ、り、（度、世、の、  
 紀、行、ハ、ア、何、国、が、宜、ら、し、（尺、柄、よ、兼、ア、ま、ら、ぶ、と、  
 事、の、憂、る、西、落、が、願、望、（と、さ、ふ、先、生、貴、丈、の、  
 意、匠、い、と、う、と、ま、ま、（東、洋、、無、れ、り、（私、が、意、匠、に、今、  
 この、洋、本、と、な、て、い、と、う、意、案、ほ、し、（が、、（西、君、が、ア、  
 日本、全、国、と、巡、行、後、と、り、と、これ、り、（新、案、し、て、

薩摩



珍談と録ものので、此書と日本で新説とはこれ、  
 新聞紙のりつものめて、久々実説のしとて、  
 一エ五紙紙ケ紙とれ、女時拜聞るアる、  
 一紙不解文字で、  
 ののの、  
 ま、我が文を目くと、  
 先生これい、  
 足るいち、  
 蚊脚行で、  
 各国よりて、  
 大同小異が

あ、  
 板と讀法で、  
 語の不解也、  
 居こつ、  
 A B C と号字教がニ十六字あり、  
 印度の悉曇の、  
 夫くト、  
 彼国まで

小説



および總物の号が雲泥と大相違するなり、たゞい  
 洋字と意讀よりみるゝとして、洋書日の意義は  
 不解ません、それとて、和解は、その対譯の書冊が  
 有て、そりやアモウ自在、詠歌が出来たる、  
 それに、そのく、面倒で、い、ま、生、徒、下、それ、なる、  
 るんぞが問、として、女も氷解、ア、ア、秋、と、  
 我、小、暫時、高、閑、せ、く、ヤ、ア、く、これ、  
 所、奇、畫、繪、が、あり、せ、  
 と、  
 此、番、と、

繪、  
 繪、  
 化粧損、  
 この洋画、  
 亞、歐、羅、巴、の、  
 限、と、  
 画、と、  
 世人、

古書  
 十四

桶まがし賛いせぬいまうまふこ心得違こころちがひでございませよ。まづこの  
 凸眼鏡めがねで洋画西洋画といふは、ごらうらんるうらんるうらんふらふ畷画のりえが、自分おのれと  
 凸突出うきあがり、怡活人いきろくの如ごとふごとまま、三一い五ご拵たてまりえん  
 るト、凸眼鏡めがねで熱悶あつもんといふやせり、たつたるたつたるる極ごくこりやア  
 怡活居人物いきろくじんぶつとあつたふふ奇妙きまうのみの權ごんハ、アアヤ  
 種北ハしんぺいそれそれ貴格きかくも熱々あつあつ、三一い五ご拵たてまりえん  
 凸眼鏡めがねといふは、あつつつ眞まなるるるる極ごくこれこれヤア白粉しろこの  
 化粧損けいざういいととぬぬが、二三さん名な顔かほ小痘痕せうとうこんのよるるものが

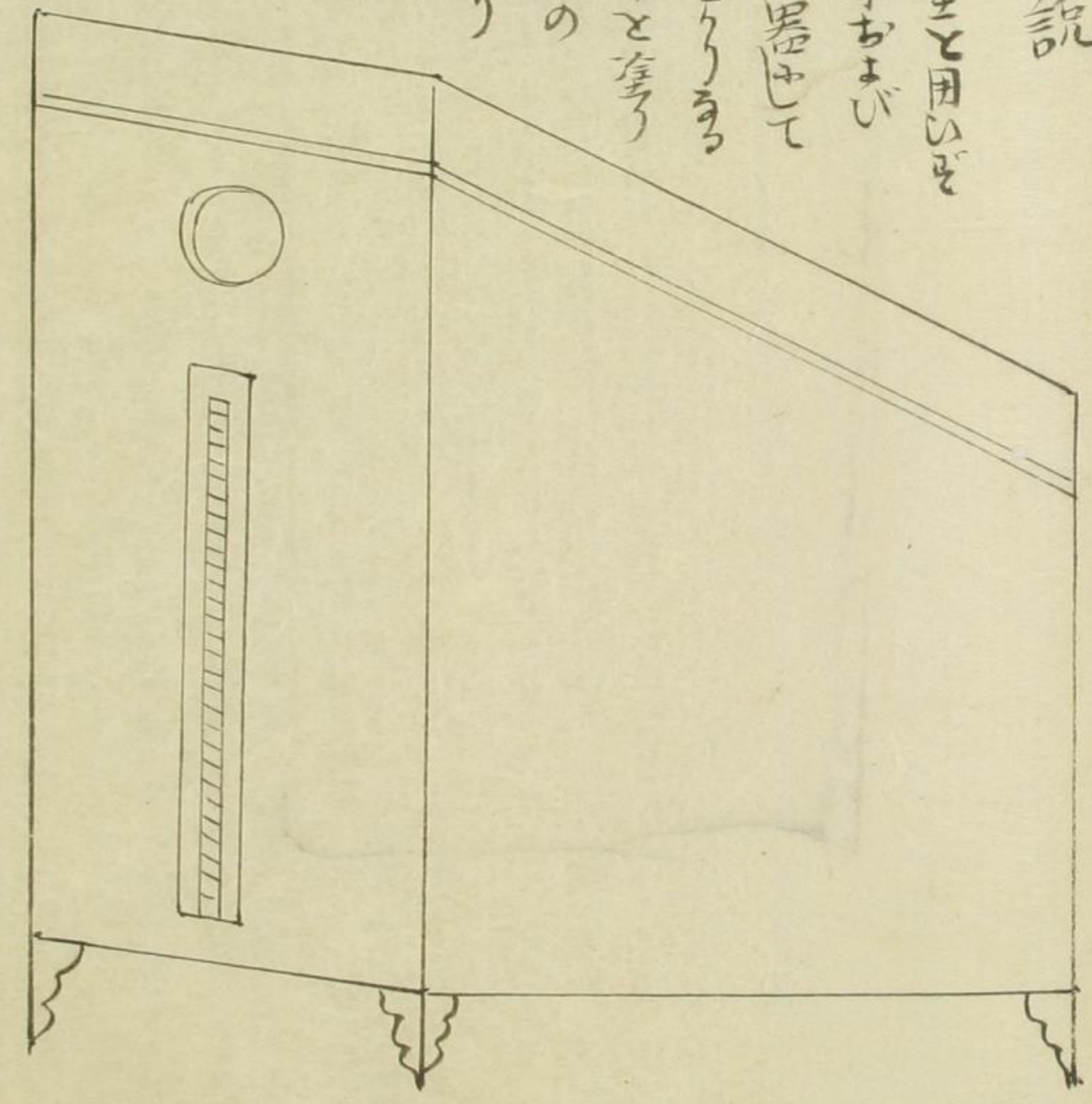
さんるよ、東洋天あまトヤア貴か天てん繪えが不凸突出ふうきもも少すくと凸眼鏡めがねを  
 あげてあげげるるよよ、二三さん名な顔かほ小痘痕せうとうこんのよるるものが  
 ヤアモウとと水みづトヤア痘痕たむけのみのみヤアせんせんちちききや  
 めめ、二三さん名な顔かほ小痘痕せうとうこんのよるるものが  
三一い五ご拵たてまりえんハ、二三さん名な顔かほ小痘痕せうとうこんのよるるものが  
 やアちちききやア、二三さん名な顔かほ小痘痕せうとうこんのよるるものが  
 そととととと、この洋画西洋画いいととして寫かきかすすは、東洋友とも種ね  
 これこれハ、二三さん名な顔かほ小痘痕せうとうこんのよるるものが

書言

山水、その他真影番と寫し取て、天々洋筆にて  
その影番と洋筆、寫しまげらるる、このころ洋書、銅版  
にて印し、このころその他顔画、このころ洋画、これ  
より、このころ格外、このころ圖画、このころ百、このころ一、このころ板  
にて、このころ人相、このころ海、このころ直寫影鏡、このころで、このころ寫し取て、このころその  
人の影、このころが、このころう、このころる、このころり、このころて、このころ矢、このころ死、このころと、このころま、このころら、このころし、このころて、このころい、このころや、このころら、このころが、このころ本、このころの、このころ一、このころと、このころい、このころま、このころら、このころら、このころは、このころ不、このころ立、このころを、このころ収、このころめ、このころして、このころ

直寫影鏡番説

此器ハ物と寫すハ筆墨と用ひ  
只日光とめて山川草木を  
人物万取の正像と寫す器也して  
昔代の珍器なり方丈むらり  
番のこころ箱の中ハ葉と在り  
乃銀盤の鏡と入れ箱の  
外面ハ穴と開きこれより  
日光とめて鏡面ハ萬  
像とうつるとこハ其影  
鏡面ハ固着とほまみ  
人目と驚くも珍器  
なり



直寫影鏡番説

五松よりいひていふせん、それの本実なるは、  
 平鏡とみるゆへに直寫影鏡へ寫して  
 人相とみるもの、鏡へ對て人相とみるは、同断て  
 こそとて、<sup>北</sup>正夫トヤア、姿影と寫する、矢死ア仕ま  
 せんの久、夫より、榮の自顔と寫し取て、情婦への  
 ぞりやせし、ア、汝ニコレサ、其様る已惚ア言ふ、その  
 しのぬ、先生が突ハアナ、貴人のよろる、惡面相と  
 ナニ、情婦がみるもの、我ア、及老るもの

吾、寄意婦人も大方はるや、<sup>北</sup>ハ、マ、それゆゑの  
 我ア、余程、美男哉とていふ、それ面相、ららく見る  
 鳥屋の孫次、<sup>北</sup>おとやア、くれ、貴人の面相、恰馬當へ  
 眼鼻とつけ、こころ、不潔、面顔、ぶ、ア、こゝ、そとで  
 先生、そのまゝ、直寫影鏡とやらア、貴人、又、智正で  
 製造く、へ、サ、製造する、<sup>北</sup>そ、<sup>北</sup>年、北八の  
 面影と寫取て、<sup>北</sup>コレサ、孫次、ゆゑ、い、り  
 けん、惡言、ハ、ま、せ、く、その、先生、孫次、ゆゑ

悪書のみやア、宗不、困入、まはよ、一イヤ、ゆるり、る水が  
まゝ、滑稽で、えんと、一與、ごらる、テ、當秋、愚拙が  
直寫、影鏡と、用ひ、る、人物の、活画と、寫画、法と、考  
まゝ、い、が、どこ、の、銅版の、原圖と、鑿、刻、て、い、限、り、の  
仕法、が、と、んと、極、尽、ま、せん、く、何、卒、し、て、其、原圖、を、  
永、得、い、いと、な、す、て、一、し、て、横、港、一、兩、三、度、の、注、文、に、し  
ま、し、い、が、と、かく、その、洋書、が、齋、物、に、い、い、ま、せん、  
それ、く、ト、ど、う、の、詮、方、が、あ、い、く、ト、自、己、夫、で、摸、擬、寫、と

十六

い、こ、ま、う、り、今、般、<sup>(友)</sup>大人、より、六、の、原書、と、讓、與、れ、漸、々  
ま、づ、願、望、成、就、と、果、一、ま、し、い、こ、ま、で、何、成、共、謝、礼、と  
い、ふ、こと、と、當、日、考、究、九、最、中、の、ところ、へ、西、君、の、い、ふ、ま、で、  
し、んと、謝、礼、の、一、条、と、失、忘、し、い、く、が、當、人、に、い、ま、づ  
何、が、有、益、事、で、ご、い、ま、せ、ま、一、左、様、と、致、茶、が、想、登  
て、い、當、今、の、貨、易、專、一、と、し、時、世、を、い、く、と、や、そ、う、先、生、の  
愚、察、を、い、萬、國、巡、覽、ウ、宜、い、こと、せ、ま、一、<sup>(東洋)</sup>一、へ、一、夫、  
り、ま、ま、何、故、に、<sup>(海)</sup>一、海、水、に、い、ま、ま、<sup>(各)</sup>一、各、國、の、風、土、記、を

藝文部 言語

抄録して謝禮する事トバ、因士人の心得とるなりぬは  
 引げぬ、此の中通り、これ一回抄録して進上が  
 ようとせし、先全何卒大畧抄録するつて  
 といふ、東洋とて、杜撰な事、録せし  
 愚拙よりいふ、その因士人の方が、五ヶ国の事、説  
 格別博識といふ事、ト、慢述にて、止る事やせし  
 引立、手、反転にて、いふ事、とめ、不口語に  
 虚説といふ事、ト、正説を、いする事、何んぞの

説書冊が、引證ふ、か、う、や、し、を、れ、ふ、う、と、私共が  
 万国、坐、障、見、ふ、祭、旅、の、以前、五ヶ国の風土、勿、漏、巡、路、の  
 崖、畧、と、い、問、や、さ、あ、ア、る、り、ま、せ、ん、ト、何、卒、不、言、者  
 抄録と、ゆ、い、や、も、東洋ナ、ア、る、程、それ、実、有、一、理、也  
 といふ、ま、る、ト、任、意、抄録、ま、せ、し、ト、東洋を、ち、う、ち、に、  
地理の、ま、ち、の、と、う、い、ふ、一、た、ら、ぬ  
 こと、め、つ、け、し、た、の、ご、と、一、

五ヶ国風土畧説  
 この、た、い、の、め、と、な、り、て、あ、こ、ご、の、ま、の、  
 こと、め、つ、け、し、た、の、ご、と、一、

東洋通言  
 巻之五

峨羅斯國ハ歐羅巴の東にありて北緯四十度より七十

度小なり一度日本里程三千五百里西経七十度より百十七度小

とる地あり二里積回全国の里面積二十四万の五百の七音里日本所問

都府と彼得堡と名け常今の帝王と亞カ山大帝と

人物ハ軀幹中等にして外貌完く天資勇力ありて

力強く身體壯健なり衣服ハ毛皮にて華麗と忍し

多クハ毛皮の暖味と用也女ハ容貌美しく威儀あり

其服ハ絹布西洋布暖味と用也毛皮と別々金銀

五彩と繡飾して頭の周圍と纏ふものあり土俗

多クハ通商と専とよる由國內ものも金銀

はそ百物備らざるとして住家ハ石と土で

造建中もの貧人ハ土室と造りてその内ハ住み耕墾

ありハ田獵と事業と其氣候ハ冬は甚だ酷寒ハ

水限も自ら氷るとして當國の産物ハ麻 臘脂

麻糸 麻索 帆布 呢絨 革 毛皮 金 銀 白金

鉄、銅、鉛、石、塩、煤炭、五穀、熊、駱、馬、あり

荷蘭國ハ、歐羅巴の西北の隅あり、北緯五十五度  
四十五分より五十三度三十分あり、西経百二十一度  
二十五分より百三十二度十五分あり、地多し、全国の里  
面積二千百〇七方里、列郡と十一省に分ち、民口三  
三百二十三万八千七百五十あり、都府と俺特坦と名り  
當今の帝王とイルム王とあり、人物ハ體形長大  
皮膚白く、外貌威ありて、賤陋く、天皇温厚にして

疑惑する、業と為る、厭倦と、字藝と好んで、物理と  
考究めり、其精微と、尽す、他邦もと、取ら、及ば、ど  
然、水と、その性、慳吝、して、施と、き、ら、ど、ま、く、衣服、乃  
製、數種、あり、多く、暖、曝と、用、也、風俗ハ、貴賤の別あり、  
士俗ハ、多し、貨、易と、骨と、一、博く、異邦、小、通、販、と、  
ゆ、り、て、先、務、と、し、海、濱、舟、楫、の、便、り、極、め、て、且、一、く、  
諸、列、の、且、市、日、々、殷、盛、は、して、繁、華、を、も、つ、も、  
大、い、り、當、國、の、産、物、ハ、呢、革、紙、煙、草、骨、非、



砂糖、香竈藥種、酪、饗菓、ちりり

佛蘭西国ハ、歐羅巴の西ハありて、北緯四十二度二分  
より五十一度五分あり、西経百二十七度より百四度  
〇二分あり、地多、全国の里面積、三万四千五百  
七十六方里、列郡と八十六都あり、人口三千五百五十  
万あり、都府と巴黎斯と名り、當時の帝王と  
イザベル女王と、人物ハ、軀幹長大、鼻高く、  
眼目鋭く、回形稍長く、皮膚白く、享賦類敏く、

言語辨整、驍勇ありて、勝利と肯と、他方の人と  
待、仁愛あり、深く又、學術と好み、百般の工技ハ  
精妙なるに、英國と相伯仲り、固より繁華殷富の  
地多、水ハ百物具備と、こころ、惣じて諸列  
あり、學藝ハ志あるもの多、こころの都府ハ、いり  
各遊學して、終ハ、技藝の高妙と、極り、こころ、  
男女の衣服ハ、こころ、美麗と、極め、婦人ハ、殊ハ、金銀と  
繡綴し、つらハ、粒ハ、或ハ、覆いて、ゆつて、具容、女と

高麗  
言

飾ふその婦人の冑子比がれハ軀幹固より小けれ  
 多し衣服と重るゆへあつて長大なるがし家屋ハ  
 くる極めて宏麗小構へその屋五六層みよるあり  
 土俗常ハ高貴と肯し他邦と巨市とと業  
 くるゆへ金銀財貨の豊富なるは西洋諸列小勝ハ  
 是とあつて土人自りその繁華小誇傲て  
 異邦と輕侮とす當國の産物ハ棉布 玳瑁  
 磁器 鏡 自鳴鐘 鉄 石 花紋石 糖 煙草

木料牛馬おるり

大英國ハ歐羅巴の西北にありて北緯五十度より  
 五十度半ありて西経百三十四度より百四十五度十  
 五分ありて地ろ、全國の里面積二萬〇二百二十一  
 方里列郡と三列七十五省に分り、民口二千七百四十  
 三万五千三百あり、都府と倫敦と名け、當今ハ  
 帝王と維多利亞とて一人物ハ軀幹長大異常  
 眼中鏡く皮膚白く、髪と世中て威儀あり、稟賦

世説新語

と親敏思慮深し言語爽快にして愛憐厚く  
まゝ、饒勇勝りて智謀あり、文学不黽勉、術藝小  
精妙と得る惣じて義と主とする風習るる也、  
その雄威殆蕩国に震ふ、男女の衣服及び帽冠の  
制、敷種あり、何れのものも美と云ふ、婦人の容貌  
最も美しくして媚愛面小溢れ、まゝ、まゝ、板敷と  
善く、おれとの嫉妬深き弊あり、国内沿海の所々  
小好港ありて、何れのものも大巨市場るる、同取

常小輻輳旅客若くは填溢てその繁華群集するも  
天下隨一の国なり、故小百物具備して、まゝ、まゝ、  
諸般の器什、時辰器、尺、論、精微、奇器と製造て、  
人目と驚き、まゝ、まゝ、この富国の奇工無限なり、邦内數  
種の民ありて、春夏ハ耕墾土小努力、秋冬ハ鱒鮒と  
捕り、皆塩培として、佛蘭西および荷蘭等、並普く  
天下小通販する所と致し、まゝ、富国の産物ハ、棉花  
綿布、毛絨、陶器、蒸気器具、金器、  
玻璃

十卷 三十四

銅、鉄、錫、煤炭、麥、肉、牛、馬、大豕、羊、鱒、介、魚、あり

合衆國ハ西美理駕の中ハあり北緯二十九度より四十度あり東経百度より百五十度あり地ろろ全國の里面積四十七萬八千八百三十七方里列郡と三十一都及び九部あり民口二千三百十九萬千八百七十六あり都府と華盛頓と名付當今の帝王と總統領ゼームス摩可南と云當國ハ往古

英人の開国にして領所ありしが英王の国政は邦人大いに苦しめて西洋紀元一千七百七十六年日本永安華盛頓と云るもの邦人の難苦を救ふと云ふ大志と起し衆と議英國と戦争と既し八年終ふ華盛頓勝利と得て後邦人華盛頓と云て帝王と爲りて依りて獨立國と云るや都府と云ふニトシと号するものと云る此人の功するを國民ハ怜れしして仁義厚く法度と守りて侵る

英人

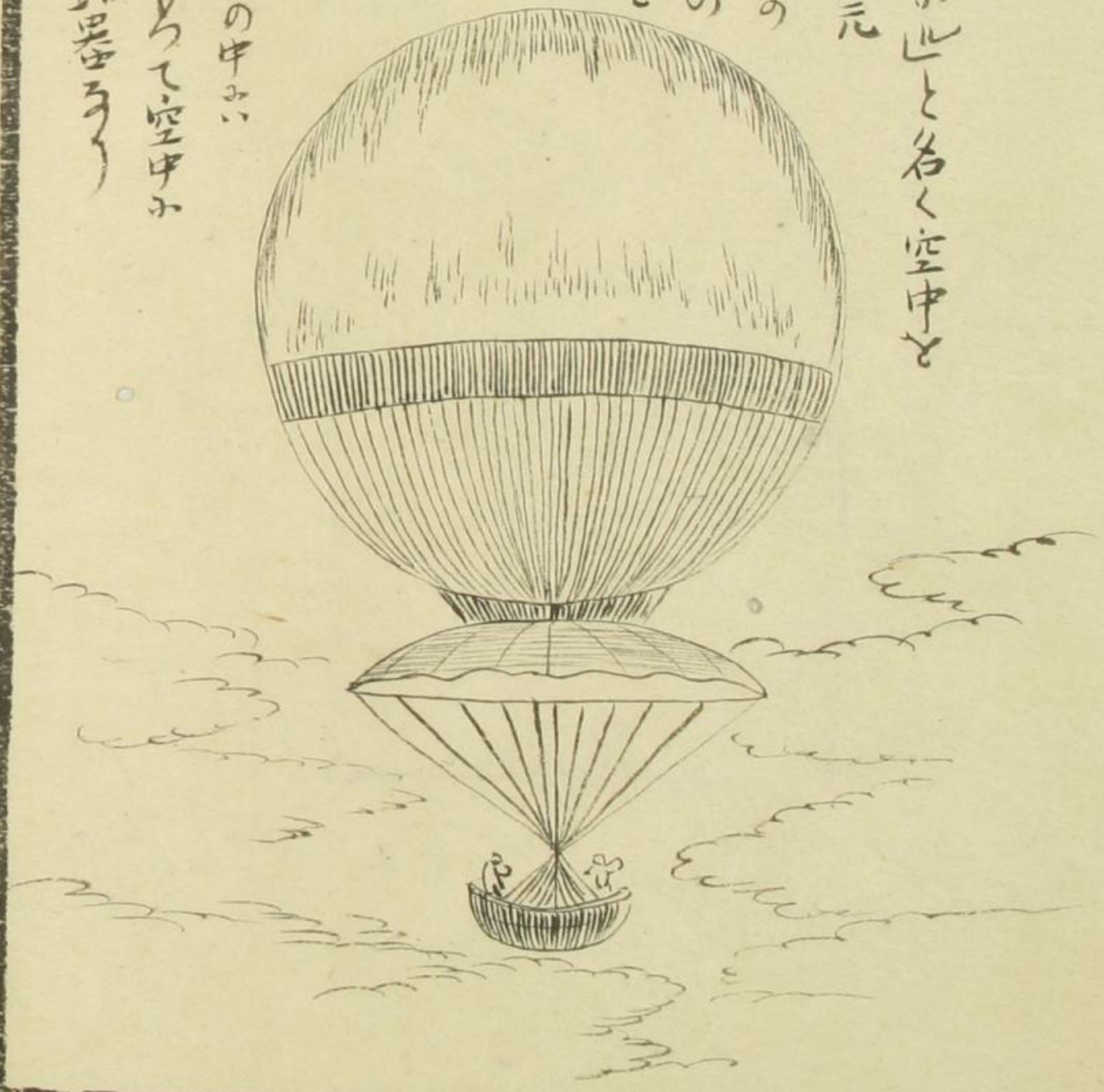
ところ、且上下貴賤の差部、住家ハ二層  
 あり、三層にして所々窓扉と開き、玻璃と以て  
 障、邦人何れも百工の伎藝ハ長きものゆゑとも  
 多し、且常々耕作および通商の業とありて至とも  
 富国の産物ハ、綿花、煙草、木料、穀、巴麻油、  
 麵粉、玻璃、磁器、皮、酪、剥笛、亞斯、黃金、錫、  
 鉄、煤炭、鯨魚油、牛、馬、鮭、鹿、狐、狸、  
 羊、おろし

東洋、伏皇、五ヶ国、畧説、地球説、畧、三文正  
 蒙、および萬国緯躰の書あり、抄録するもので  
 さい、さいと、猶委しくハ、就本編て詳識下  
 王、大凡如説右てさい、さいと、思、拙、各国  
 街て、おろし、ところ、おろし、これ、正説、おろし、おろし  
 從、是、西、君、横、港、へ、船、行、る、り、且、船、便、と、得、て、  
 ま、り、亞、美、理、噶、渡、国、ま、り、り、亞、非、利、加、歐、羅、巴、  
 亞、細、亞、の、五、大、洲、と、往、巡、て、結、局、ハ、大、清、の、崎、港、へ、



# 軽気球昇論

気球ハ西洋にて「モンゴルトボール」と名く空中と  
 飛行する器なりて西洋紀元  
 千七百八十三年我天明佛蘭西の  
 モントゴルトボール此尺牙なるもの  
 始めてこれと發明し諸人と  
 驚異せしむるものあり  
 屆のいくとハ華にて造り  
 たる巨空球とせり其下ハ  
 下ハ巨傘とせり且下ハ  
 藤にて造るる船とつるが  
 その中人と乗る又空球の中ハ  
 軽気球と云ふ器具とありて空中ハ  
 騰らしむる事ハ古代の珍事なり



空中と浮走る器が製造するは大方横港より  
 での異人が歌弄ハこの気球に乗て遠近を遊走  
 くのきれませんくハ一先鬼舟のこれハ横港ハ  
 滞旅気球に乗る候と得るれハ萬國ハおとるさ  
 まハ「エ」をんるハ巨根とヤセハ「子」年内ハ  
 餘日ゆるい節気力方であんまハ戲述と祭儀の不結  
 局とるらるハ此条めて直止ハヤセハ「東」  
 ちハ飯宅久ハ雨君ハ随分堅固で巡行洒落るさハ

まー、<sup>三</sup>「<sup>三</sup>反極る」先生<sup>せんせい</sup>往てまうまう、安泰<sup>あんたい</sup>に如<sup>ごと</sup>に在<sup>あ</sup>。  
 此れ<sup>これ</sup>に先生<sup>せんせい</sup>大分<sup>おほいぶん</sup>に鉄<sup>てつ</sup>面<sup>めん</sup>皮<sup>ひ</sup>とごいほし、まう、<sup>三</sup>飯<sup>いひ</sup>期<sup>き</sup>  
 得<sup>か</sup>拜<sup>はい</sup>顔<sup>がん</sup>まも、<sup>三</sup>ト<sup>と</sup>は<sup>は</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>この<sup>この</sup>ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>、<sup>三</sup>東<sup>とう</sup>洋<sup>やう</sup>  
 一<sup>いち</sup>寸<sup>すん</sup>此<sup>こ</sup>庵<sup>あん</sup>前<sup>ぜん</sup>まで、<sup>三</sup>ハ<sup>ハ</sup>イ<sup>ハ</sup>何<sup>なに</sup>角<sup>かく</sup>御<sup>ご</sup>用<sup>よう</sup>な<sup>な</sup>、<sup>三</sup>東<sup>とう</sup>洋<sup>やう</sup>  
 る<sup>る</sup>が<sup>が</sup>何<sup>なに</sup>年<sup>ねん</sup>この<sup>この</sup>、<sup>三</sup>と<sup>と</sup>飯<sup>いひ</sup>宅<sup>たく</sup>が<sup>が</sup>け<sup>け</sup>、<sup>三</sup>友<sup>とも</sup>の<sup>の</sup>貴<sup>き</sup>店<sup>てん</sup>、<sup>三</sup>差<sup>さ</sup>上<sup>じやう</sup>て  
 お<sup>お</sup>ま<sup>ま</sup>ん<sup>ん</sup>る<sup>る</sup>せ、<sup>三</sup>一<sup>いち</sup>致<sup>ち</sup>兼<sup>けん</sup>知<sup>ち</sup>ま、<sup>三</sup>ハ<sup>ハ</sup>イ<sup>ハ</sup>反<sup>はん</sup>極<sup>かく</sup>る<sup>る</sup>ア。

萬國遊記 初編 終

木原本



